



## 野菜の害虫の紹介

【指導員】 園芸果樹課 吉田 稔

田植え作業も終わり、病害虫の発生が盛んになる季節となりました。今回は、野菜の害虫について紹介します。

野菜は品目が多く栽培様式も多岐にわたるため、害虫の種類やその発生時期も多様です。

【ネキリムシ】 地中で生活する幼虫が発芽後あるいは移植後に、若齢幼虫は生長点付近を食害し、中齢以降は茎葉を切断して地中に引き込み食害します。

【ヨトウ類】 多くの野菜の茎葉を食害し若齢幼虫は葉裏などで集団生活することが多く、中々高齢になると分散して日中は地中などに潜み、夜間に作物を食害します。

【タバコガ類】 果実や新芽を好み、加害部分には穴をあけて食害します。トマトをはじめとするナス科野菜やオクラなど多くの作物で発生します。

【コナガ】 アブラナ科野菜に特異的に発生する小型の蛾で、成長が極めて早く被害は一気に拡大します。葉裏から円形または不整形に葉肉だけを食し表皮を残します。アブラナ科野菜ではモンシロチョウの幼虫（アオムシ）も多く発生します。



モンシロチョウの幼虫(アオムシ)

【アブラムシ類】 被害には、吸汁による樹勢の低下などの直接被害のほかに、ウイルス病の媒介などの間接被害があります。薬剤抵抗性が発達し

やすいため、異なる成分の薬剤をローテーションして使用することが必要です。

【ハモグリバエ類】 ハモグリバエは春と秋に発生して多くの作物を加害します。ネギハモグリバエはネギ類で特異的に発生し、発生すると品質が著しく低下します。

【アザミウマ類】 トマトでは、産卵痕が白ぶくれ症の原因となり品質を低下させます。ウイルス病を媒介するため、少発生でも被害が大きくなる場合があります。ネギでは、食害痕がカスリ状となり、品質を低下させます。盛夏に爆発的に個体数が増え防除が手遅れにな



アザミウマ

るため、発生初期の徹底防除が重要です。

【オオニジュウホシテントウムシ】 大型のテントウムシで、成虫と幼虫がナス科野菜の葉を葉裏から表皮を残して網目状に食害します。

【ハダニ類】 特に被害が多いのはナス科、ウリ科、イチゴです。主に葉裏に寄生して吸汁し、被害は下葉から徐々に上葉に広がり、激発するとクモの巣状の糸をはります。高温、乾燥を好むため夏季の発生が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいため、異なる成分の薬剤をローテーションして使用する必要があります。



被害を低減する第一歩は早期発見に努め、必要な対策を講じる事が基本となります。薬剤に関するお問い合わせは最寄りの営農センターへご相談ください。